



Kyushu University

日 時

10/5(土)–11/16(土)

毎週土曜日

14:00–16:00

(全7週7講義)

但し、10/5と11/16は
各々開講式と閉講式を
行うため下記の通り時間が
30分前後します。

10/5 13:30–16:00

11/16 14:00–16:30

会 場

九州大学大学院

言語文化研究院

箱崎分室 3F304大講義室

(福岡市東区箱崎6-10-1)

*裏面の地図を参考して下さい。

受 講 料

7,200 円

申込方法

住所・氏名(ふりがな)・電話
番号・メールアドレスを明記
し下記の3つのいずれかの方
法で申込みください。申込み
確認後、1週間以内に受講料
振込みの案内を致します。

なお、お申し込み後、1週間経
っても振込等の連絡がない
場合はお問い合わせ願います。

1. 郵 送

宛先:〒819-0395 福岡市
西区元岡 744 番地 九州大学
比較社会文化学府等庶務係
公開講座担当 ☎:092-802-5782)

2. FAX

092-802-5791

3. E-mail

hbxsyomu5@jimu.
kyushu-u.ac.jp

締 切

9/20(金)

* 所定の時間数を受講された方
に修了証書を授与いたします。

九州大学 2013 年度

公開講座

文学 と 人生

～英・米・独・仏・中・日に見る文学と人生の織りなす情景～

小説、自伝、戯曲、詩、児童文学など多彩なジャンルを擁する文学ですが、ジャンルごとに表現の方法と内容、さらには目的が異なります。従ってジャンルが異なれば、読者側の文学の受け止め方も関わり方もとうぜん変わってきます。作者にとっても事情は同じです。ただ、作者の場合、ジャンルの相違によって関与の質が変化する点は読者と同じとはいえ、文学と日常的に直接向き合っているため文学の持つ重みと意味は読者以上に切実かつ特別であろうと考えられます。

では、読者にとって、作者にとって、文学と人生はどう関わり、どのような意味を持つのでしょうか。この講座は、文学を考える上で大変重要で興味深いこの問題を明らかにするため、英、米、独、仏、中、日の六カ国の文学を対象にして文学と人生の織りなす多彩な情景を取り上げ、作者の立場から、読者の立場から、さらには社会的、文学史的観点などから、その実相と意味を解明する試みです。

近年、人間も含め全てを数值的、データの的に捉え、有用性の有無によって評価を下す科学的傾向が顕著です。しかし、人間の精神や生き方は数值的基準で測るべきではありませんし、また測ることが出来ません。文学は人間のそうした部分に光を当てる芸術です。時に無用視される文学ですが、数値化とデータ化による価値観から人間性を擁護する砦となりうる可能性を秘めています。この講座が文学の意義と意味を改めて考える機会になれば幸いです。

第1講(10/5) : **アメリカ文学の中の『お金』** —— 「お金」から眺める人間関係
下條 恵子・・・九州大学大学院言語文化研究院准教授

第2講(10/12) : **放浪の文学者 D. H. ロレンスと文学**

吉村 治郎・・・九州大学大学院言語文化研究院教授

第3講(10/19) : **自伝とアメリカ文学 —— 実人生を作品で描くことについて**

岡本 太助・・・九州大学大学院言語文化研究院准教授

第4講(10/26) : **フランス文学に現れる「読者」の系譜**

佐藤 典子・・・九州大学大学院言語文化研究院准教授

第5講(11/2) : **ゲオルク・ビューヒナーの人と作品**

津村 正樹・・・九州大学大学院言語文化研究院教授

第6講(11/9) : **児童文学と人生の選択肢 —— ジェンダーと多文化主義の視点から**

谷口 秀子・・・九州大学大学院言語文化研究院教授

第7講(11/16) : **明治日本と清末中国における『椿姫』の翻訳**

中里見 敬・・・九州大学大学院言語文化研究院准教授

主催 九州大学大学院言語文化研究院

<http://www.flc.kyushu-u.ac.jp>

公開講座 2013

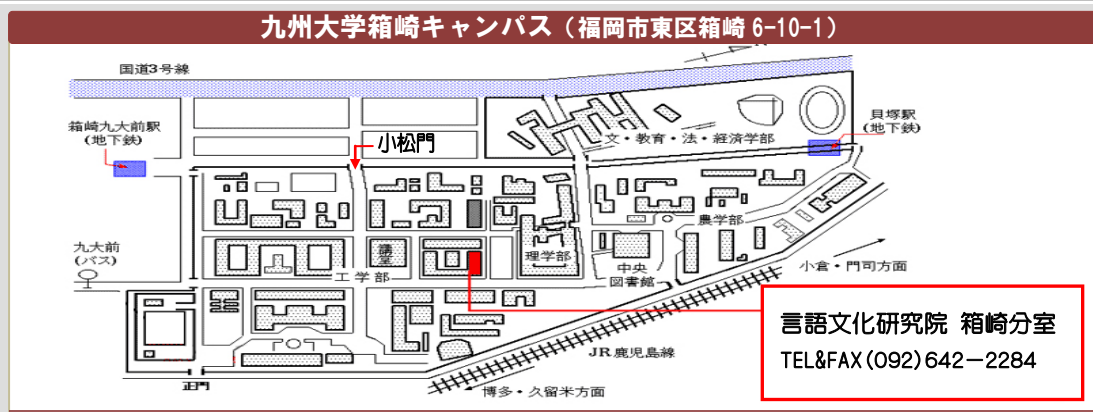
日 時：10月5日(土)～11月16日(土) 毎週土曜日 14:00-16:00
 会 場：九州大学大学院言語文化研究院 箱崎分室 3F304 大講義室

但し 10/5 は 13:30-16:00
 11/16 は 14:00-16:30

10/5 13:30 開講式(第1講開始30分前)

<p>10/5 第1講 14:00-16:00</p>	<p>アメリカ文学の中の『お金』——「お金」から眺める人間関係 九州大学准教授 下條 恵子</p> <p>かつてマルクスがシェイクスピアを引用しながら、貨幣とは「私を人間の生活に、社会を私に、私を自然と人間とに結びつける紐帯」であり、それ故に「一切の紐帯を解きはなしたり結び付けたり」できる「一般的な縁切り的手段」でもであると論じたように、様々な文学作品が「お金」を通じて人間の在り方の本質を描いてきた。アメリカ文学も、特殊な「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」に基づいて発展してきた国の文学として、金銭問題を題材にアメリカ固有の人間関係や社会問題を浮き彫りにしてきた。今回はメルヴィルの『信用詐欺師』(1857)、フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』(1925)、オースターの『ブルックリン・フォリーズ』(2005)など様々な時代に書かれた作品を「お金」という視点から分析し、そこに書かれた信用問題、成功の夢、互助精神など、アメリカ特有の「人間関係」と「人生」の諸相について論じてみたい。</p>
<p>10/12 第2講 14:00-16:00</p>	<p>放浪の文学者 D. H. ロレンスと文学 九州大学教授 吉村 治郎</p> <p>ロレンスの晩年は相次ぐ放浪の連続でした。1919年、彼は妻フリーダを伴い英国を出奔し、その後、一時帰国はあっても二度と母国への定住はなく、イタリア、セイロン、オーストラリア、メキシコ、アメリカなどを転々としします。その旅は、何かに追われるような、また求めるような流転でした。そして、1930年3月2日、滞在先の南フランスで持病の肺疾患のため45歳で生涯を閉じるに至り、ようやく12年間に及ぶ長い旅は終わります。この放浪の時期に重要な作品の多くが書かれており、彼の文学の本質を考える上で、放浪を特徴とする彼の人生を無視することはできません。それでは、文学のために12年間の放浪も厭わなかったロレンスにとって、文学とは何であったのでしょうか。放浪の人生という点から、彼の人生と文学の関わりを考えてみます。</p>
<p>10/19 第3講 14:00-16:00</p>	<p>自伝とアメリカ文学——実人生を作品で描くことについて 九州大学准教授 岡本 太助</p> <p>アメリカでは伝記・自伝・回想録の人氣が高く、広義のアメリカ「文学」の中でも重要な位置を占めています。この講義では、アメリカにおける自伝的文学作品の特徴とその魅力を紹介します。ただし自伝と言っても、今回取り上げるのはあくまでも自伝的要素の強い文学作品、つまり作家が本人の役で登場する小説や、家族との思い出をお話として再演する芝居などです。言うなれば、作家が自分の人生を題材にして物語を作り出すわけですが、実人生をただありのままに描いても文学にはなりませんし、題材の料理のしかたも様々です。自伝を文学へと昇華させるための工夫や仕掛けに注目しながら、文学の新たな楽しみ方を探ってみましょう。</p>
<p>10/26 第4講 14:00-16:00</p>	<p>フランス文学に現れる「読者」の系譜 九州大学准教授 佐藤 典子</p> <p>文学作品を「読む」とはどういうことだろうか。作者の意図を理解する、執筆当時の歴史状況を読み取るといった古典的な読み方に加えて、20世紀後半には現実の読者との関わりがにわかに重要視されるようになり、さまざまな理論が提示されるに至った。しかしそのような議論が始まるよりもはるか以前から、文学作品の中にはしばしば「読者」が登場してきた。この仮定された「読者」は、現実の一般読者と、あるときは乖離し、あるときはばりりと重なりながら、私たちの読書を豊かにしてくれる。こうした「読者」は、どのように作品上に現れてくるのだろうか。今回は中世・ルネサンス以来のフランス文学史をさかのぼり、いくつかの例を取り上げて、読むという行為を通じて私たちの人生と文学とがどのように関わるのかを考えてい。</p>
<p>11/2 第5講 14:00-16:00</p>	<p>ゲオルク・ビューヒナーの人と作品 九州大学教授 津村 正樹</p> <p>1834年夏、貧農向けの扇動パンフレット配布活動が失敗に終わり、ゲオルク・ビューヒナーの身には危険が迫り、亡命の準備を進める。その不安な日常の中で彼は、熱にうなされるようにして5週間で戯曲『ダントンの死』を書き上げる。亡命の費用を捻出するためという理由であったらしいが、稿料が届く前に彼はストラスブールへ亡命する。彼はそこでは自然科学の研究にいそんでいる。そしてそれと同時に小説や劇を創作している。彼は自分の天職を文学創作には見ておらず、あくまでも解剖学を中心とする自然科学の研究を進めた。その論文が評価を受け、次の生活の地チューリヒ大学へ招聘される。しかしその地で講義を始めてすぐにチフスにかかり、23歳の短い生涯を終える。政治的迫害と自然科学研究のあわいを縫って表現された彼の文学作品は今なお強烈な光を発してやまない。彼にとって文学表現とはいかなる意味の営為であったのだろうか。</p>
<p>11/9 第6講 14:00-16:00</p>	<p>児童文学と人生の選択肢——ジェンダーと多文化主義の視点から 九州大学教授 谷口 秀子</p> <p>『シンデレラ』や『白雪姫』などの西洋の伝統的なおとぎ話に限らず、現代の子ども向けの本、漫画、アニメなどにおいても、因襲的な女性像・男性像やステレオタイプ化された性役割が見うけられることが少なくありません。一方、近年の子ども向けの作品においては、ステレオタイプ化されていない多様な女性像・男性像を描くことによって、子どもたちに将来の人生における多様な選択肢を提示しようとする動きもあります。本講義では、子どもの本に見られるジェンダーを概観した上で、ジェンダーにとらわれない人生の多様なロールモデルを子どもたちに提示しようとする試みについて考察します。</p>
<p>11/16 第7講 14:00-16:00</p>	<p>明治日本と清末中国における『椿姫』の翻訳 九州大学准教授 中里見 敬</p> <p>19世紀末、西洋文学の翻訳によって、日本や中国ではそれまでの古典的文学観が一新され、近代的な文学が生まれました。文学作品を読んで人生を考えるという読書行為が成立するのもこの時期からのことでしょう。今回は、フランス近代恋愛小説の傑作、アレクサンドル・デュマ・フィス『椿姫』(1848)が、日本と中国でどのように翻訳されたかを見ることによって、東アジア両国の伝統がどのように転化され、新たな近代翻訳文学が生まれたかを考えてみます。 光文社古典新訳文庫、岩波文庫、新潮文庫等で『椿姫』の現代語訳を入手できますので、読んでおかれるとわかりやすいと思います。</p>

11/16 16:00 閉講式(第7講終了後)



箱崎分室 URL <http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/hakozaki/map.html>